樹の中の鬼

対談集

石牟礼道子

石牟礼道子

対談集

樹の中の鬼

朝日新聞社

樹の中の鬼

一九八三年二月二十八日第一刷発行

定　価／一三〇〇円
著　者／石牟礼道子
発行者／初山有恒
発行所／朝日新聞社
〒104東京都中央区築地五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇
印刷所／明善印刷株式会社

Printed in Japan　0095-255059-0042

目次

I

文化と風土と人間――藤田省三／石牟礼道子……5
海をめぐる思い――小川国夫／石牟礼道子……29
《辺境》論を越えるもの――谷川健一／石牟礼道子……65
不知火の世界と科学する心――色川大吉／石牟礼道子……79

II

生死のあいだで――多田道太郎／石牟礼道子……105
いずれあとから参ります――野坂昭如／石牟礼道子……124

呼応するエロス――見田宗介／石牟礼道子……144
Ⅲ
生民の系譜――荒畑寒村／石牟礼道子……171
阿賀の万年雪――松田道雄／石牟礼道子……192
〝祈るべき天と思へど天の病む〟――上野英信／石牟礼道子……213
都市の襞を這うもの――黒井千次／石牟礼道子……236
あとがき
初出一覧

装丁　田村義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

樹の中の鬼

I

文化と風土と人間

藤田省三／石牟礼道子

藤田　ぼくは漢詩なんか分からない者なんですけど、ホー・チ・ミンの詩に道端の小さな石ころの里程標に向かって、語りかけている漢詩がありまして、とてもぼくは好きなものなんです。「お前さんは帝王みたいな位の高いものじゃなくて、道端の片々たる小石にすぎないけれども、旅人はお前さんが、方向を教えてくれるから道を間違えないですむ。だからお前さんの功績は小さくない。人びとは永久にお前さんのことを忘れないだろう」という意味のものなんです。里程標というと、いまは登山の里程標くらいにしか理解しなくなっているんだけど、昔に遡っていけば、里程標の持つ意味というのは深くなっていくんで、昔は「サヘの神」だったものでしょう。

そういう基本的なところから再編成するのが革命なんで、ホー・チ・ミンが革命家であるのも、ベトナム革命が本当の革命であるのも、そういう所にまで眼が届いているからなんだ、と私なんかは考えているんです。ところが日本の新聞や雑誌なんか見ると、ポスト・ベトナムがどうのこうのという

ふうに、国際的政局主義で解説することばかりしている。そこが少々腹立たしい感じがするんです。「サヘの神」に始まる里程標の石ころは、時間的にも人間社会と共に古いし、広がりからいっても世界的に普遍的なものなんでしょう。その石ころの意味を現代社会はしばしば見失っているんですね。その見失いの度合は日本がいちばんひどいでしょうね。地名にしても同じ事情があって、池袋という名前にも意味があるのに、東がついたり、西がついたりいくつにも分かれている。

信濃に更埴市というのができた。更科郡と埴生郡が両方合併して、一字ずつとって音読みにして「コーショク」市となった。これじゃ何の意味もなくなる。更科には更科の意味があるわけでしょう。こうなると、交通信号と同じで、赤が危険だと決めたのは恣意的に決めたので、人間はもともと赤を危険だというふうには思っていない。青の場合だってそういうものでしょう。それと同じように、全部、記号の世界で処理している。

石牟礼　私どもの田舎でも区画整理をいたしまして、昔からあったものを全部消してしまって、何丁目何番地とか、桜が丘、山手町とか……。その区画整理を実行した人が表彰されたりしましてね。私はその新しい何丁目式を使わないんですけど。昔のままの日当猿郷の住人でいます。海岸つきの、田んぼのなかの部落で、何丁目でもないんです。部落といわなきゃ、そこにいる感じがしない。郵便屋さんが、最初は、郵便もって来てくれるたびに、ここは白浜十丁目何番地ですと、親切にいいますから、そうですか、といっておいて、また猿郷と書くんです。このごろは日当猿郷と書くのは私の家一軒になって、郵便屋さんも昔からの人で、そのまんま持って来てくださいます。

藤田　ぼくの田舎は瀬戸内海の大三島ですけれども、田には一枚一枚名前がついているんですよ。田圃の町というのがありました。町名の町というのは、古代語では田の区画なんですね。ぼくは口総という部落なんですが、口が窄んだ港なんです。一山越えると隣りは灘へ抜ける、ここは九州の宗像と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

同じ語源でしょうが宗像というんです。ぼくの家は口総部落の横というところなんで、通称横の省三で通っていた。苗字は明治以後できたものですから、まだ定着してなかったのでしょう。本なんか出しますと横の省ちゃんの本が出たと、今治あたりまでポンポン船に乗って二時間半くらいかかって買いにくるんですね。ないと注文して、またとりに出かける。そういう人がいるらしいんです。これはかなわないですねえ。だから帰れないんです。（笑）

石牟礼　（笑）

藤田　いま保元、平治物語をちょっと調べているんですが、古代律令のもっとも退廃したところで藤原時代が終わるでしょう。その中世が始まる時代の侍を見ていると、名前の上に官職が三つか四つつくでしょう、ふつうは。それに対して鎮西八郎為朝のような新時代の英雄は、地名や得意芸を名前にしている。鎮西は九州の意味でしょう。九州一の八郎さんということでしょう。地名が人名になっているというのは古代から割合ありましたね。為朝につき従っていた二十人くらいの人はみんな渾名で呼ばれてますね。礫の紀平次とか手取りの何とか、そういうのが物語の世界に出てきはじめたら、躍動した社会が出てくる。これは一つの変革期の特徴ですね。

石牟礼　都会から水俣にやってくる人を見てますと、二つありまして、土地に居つく人というのは、その土地のおばあちゃんたちが「あの人は昔東京からきなさった人で、東京からきなさったときは、おっ立て帯してなさった奥さんじゃったが、いまは百姓覚えて、百姓ばかりしなさるようになった」というふうに、東京からきた人というのは自分たちが見たこともない都から天下って来た貴い人だと大切にされているのですね。

今でもそういうことはありまして、娘さんだったりすると大事にされているのですね。この人東京のよかとこのお嬢さんだというので大事にされる。男の子でも気に入れば、嫁さんを世話しようとい

う人が出てきたりする。そういう受け入れ方と、人相書をまわされるようにして排除されるのとあるわけです。為朝伝説ができ上がるのは、あとのことで。

藤田　そうでしょうね。大三島でも戦後間もなくのころ、東京からきた人をいきなり村長さんにしようというので、まず青年団の人たちに同意をもとめたりして……。そのうちだんだんその人のことがわかってくると、その瞬間から相手にされなくなる。

石牟礼　そうですね。

藤田　ぼくはホラを吹くときは、大三島で先祖代々中央集権に反対で、中央集権のコミュニケーション・ルートを分断するのが先祖代々の職業だったというのですけれども……。しかし、海に依拠しているそういう島に、ぼくの推定では宗教的に真宗が征覇したためでしょうが、漁民が少ない。

島ですから山と海と段々畑とほんの少しの田圃ですよ。日本の平均でいえば、貧農の部類に入ってるんですよ。農業理論上ふつうには三反百姓といったら貧農の典型でしょう。ぼくの家が二反三畝ぐらいだったですからこれは極貧農ですよ。ところが、島のなかでは中以上なんですね。宗教征覇で真宗が入って、漁民が少なくなり、採集経済に逆戻りするというのはちょっとおもしろい。

石牟礼　漁民と農民が半々に混じっているわけですね。二反三畝は貧農じゃないかとおっしゃいましたが、あとは海からの採集経済でまかなっているんですね。

藤田　そうなんです。カキを打ったり貝を拾ったり、白田の肥料も主に藻葉（もは）をテンマ船で取ってそれを使ってましたから。ぼくの従兄がまだ島にいまして、一年に一回ぐらい話を聞きますと、観光で人がきてくれることがうれしいんですね。それは多少わかるんですけど（笑）……。海は汚なくなっただろうというと、いやまだきれいだ、潮の流れが速いから、と。それも自慢なんです。橋がつくという、それも自慢なんです。人がくるような設備ができると海を汚なくする、そういうふうには考えない。

石牟礼　水俣あたりでも、三反もやってりゃ、「ほう」というぐらいですね。私の家の場合は一反七畝。これはしかし貧農ですね。しかも小作です。なんで補っているかというと、海のものをとったりして、けっこう貧しいという意識がぜんぜんなくて……。厳密にいえば貧しいのですけれど。

藤田　ぜんぜんないですよね。でも中学校のとき一度いわれましたよ。その一度が残っているんですが、「なんだ、島か」といわれた。そのときはじめてはっと思った。四国だって島なんですが、われわれのほうからいうと地方（じかた）というのです。お百姓さんの規模が違うわけですから。それでも島のなかにも三段階ぐらいの差別がありましてね、地方へいくと今度は島全体が少々差別されるわけですね。

石牟礼　天草の島に五橋という橋がかかりまして九州とつながったんですね。で、天草にいきますと、目の前に見える水俣のほうをさして、九州本土というんですよ。がくぜんとしましてね。（笑）

最近天草へ赴任した先生がいまして、その中学校の先生に、東京の小学校の校庭がセメントで固めてあって唖然とした、という話をしたんですね。その話から、その先生が、天草に橋ができて、道路がはじめてコンクリートになったというのですね。天草の道幅はとても狭いのですよ。自動車二台ゆき来するのはどだい無理な道幅なんですけれども、しだいにコンクリートになりつつあるという。ある日道がコンクリートになった村の学校からコンクリート道ではない村に遠足にいったんですって。

そうしたら、そこの村の子供たちとゆき違うときに「おまえのところは、コンクリート道もない田舎じゃなあ」と憎まれ口をいうんですって。いわれたほうも「おまえたちのところも、このごろしたばっかりじゃろうが」といったんですね。いい返すんだけれども、実に口惜しげで、ですから、小さな子供たちでも、おまえのところは田舎じゃないかと……。

藤田　ぼくの島でも橋をかけるのを喜ぶはずですねえ。日本の場合は抑制力なしにやられてしまうからこれはこわいですね。

藤田　水俣という地は水路とか、川とか、方向の集散地というような俣をなしているという意味ですか。

石牟礼　そういう感じもしないことはないですね。文化圏みたいなものは島原のほうに開いてまして、年寄りたちの話では熊本というのは幕藩体制下の城下町で、お江戸からよろずの亜流がくだってきて、熊本の文化圏というものがある。たまたま熊本と水俣との間に三太郎峠という峠が三つありまして、薩摩様も参勤交代のときあまりの難所だもので、通るのをいやがり、水路で長崎のほうへいったというのです。

この峠に阻まれていたため、開明的な医者なんかは、長崎のほうへ子供を遊学させたもんだ、熊本にやるより長崎にいったほうが人間が開ける、素封家たちはそうしていたというんです。長崎というのは支那大陸に直接つながっているから、日本文化というのは長崎を通ることによって、自分たちのものになるのだと、熊本のほうは都の文化の亜流だという、そんな感じ方を年寄りたちはしていたようですね。そういう年寄りたちとも十年くらい前までは話ができたんですが……ぽつぽつ死んでいきますから……。

藤田　十年……。

石牟礼　はい、十年前ころからそういう人たちがいなくなってきまして……。東京も近くなりましたから、もうだめですね(笑)。地域の文化人みたいな人たちのなかには意識が東京を向いている一派もあるんですけれど、そんな人たちでも道路や建物のコンクリート化と同時にやってきた情報化社会に、さすがに食傷してきて、あまり東京化しないうちに、なにか自分たちのなかの伝統を思い出そう、という動きが出てきているんですが、なんとなく浮かぬような感じですね。もう根がなくなっちゃって

るのですね。若い世代がほんとに流動していますからねえ、ほんとにだれに呼びかけたらいいのか……という感じがありますね。

藤田　故郷を出てしまった出郷者と、故郷にいながら、精神のレベルで出郷せざるをえない破目に陥ったものを、等距離の点で見なければいけない、ということを書かれていましたね。

石牟礼　苦しまぎれに、自分が……。(笑)

藤田　ほんとうにそうだろうと思いました。

石牟礼　どこにも定着できませんでしょう。東京にももちろん気持は……。

藤田　東京は出稼ぎ労働の場所ですから……。東京育ちの人にとっても出稼ぎの精神で生きてますのですね。瀬戸内の島も一挙に橋がかかりで、定着するところがなくなって……。ぼくが高等学校のときには、まだおふくろの編んだ草履をはいてましたよ。草履のカカトのいちばん圧力のかかる部分にボロ布を入れておけば強いんですよね。尻から切れていきますから……。尻切れトンボというのは草履からきたんではないですか(笑)。あてにならない説かもしれないけど……。そんなふうにして、着古しの使い物にならなくなったのをみんなとっておいてカカトの部分に入れたりする。

佐渡の歴史を読んでおりますとね、江戸時代の佐渡の人たち、着物は江戸でぼろぼろの古着を買ってきて、それをぜんぶ裂くわけです。裂いたのを木の皮と編んでそれを着ていたというのですね。これはまた一段と違うわけですね。

石牟礼　私の母がなんでもとっておくのですね。そんな着古しのたぐいをぜんぶ昔は、草履にも、おむつにも使っておりまして。赤ちゃんのおむつにも年寄りのおむつにも。人間はいつどういう目に会うかわからないから、というんですね。いつ下(しも)の始末をひとさまにしてもらわなければならないかわからないから、そういうときのためにとっておく。いまは紙がちゃんとあるからといっても、この前

のトイレット・ペーパー騒ぎのときは、それ見ろ、といって。私の村のそういう年寄りも減ってまいりましたけれど。南九州の農家のご不浄に、ちゃんとトイレット・ペーパーが使われるようになってからは……。それまでは白い紙なんて使わなかった。

藤田　そうでしたね。ぜんぶ新聞紙か雑誌だった。

石牟礼　トイレット・ペーパーが使われだしたのはここ五年ぐらいですね。その前、私が行商してましたころ、薩摩のほうにいきますと、竹ベラとか木の葉とかおいてあるのですね。もうありませんね。

藤田　竹ベラは他の地方にもあるようですね。

石牟礼　それをお風呂にくべて、その木灰がまたためになるという……。ごぼうの葉っぱがいいとか、つわぶきの葉っぱはだめだとか、いろいろな知恵がありまして……。おかしいんですよ。東京で坐り込みしているときに、学生たちが、ビラ作るの好きでしょう。『日刊恥ッ素』というのを発行してまして、お金がないからワラ半紙を四つぐらいに切って、水俣病の患者さんに心をこめて配る。思いだけはこもっているつもりだけれども、学生用語の類型が並んでいる。「えーえ、あれが新聞ちなあ。なんのこつば書いてあるか、ようわからん。紙代のもったいなか。毎日毎日送ってくるばってん、切手代もかかるがもったいなか。便所の紙にもならんが」と、患者さんにいわれて学生はがっかりしましてね。(笑)

便所の紙にもならんというのは、紙質や大きさのことだけじゃなくて、昔の竹ベラとかごぼうの葉っぱ、蕗の葉っぱを使っていた人たちが、字を覚えるようになってから、雑誌やら新聞やらをおくようになって、便所学問というのがあるんですね。百姓は、さあ新聞読もうとか、さあ雑誌読もうというのははばかられますから、女たちもお便所で字い見てきた感じみたいなものがあったんですね。そこにあったのは、もちろん総合雑誌の類ではなく、もっと大衆的な読み物で。そういう批判も含まっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com